掲載日　2016年02月18日　日本経済新聞夕刊　009ページ

(C) 日本経済新聞社　無断複製転載を禁じます。

がん社会を診る

中川　恵一

治癒と５年生存率の関係

厳密にいえば、がんには「完治」はありません。乳がんなどでは、ごくまれですが、治療後20年以上たってから再発するケースもあるからです。しかし、それでは患者は一生通院することになってしまいます。早期がんの場合は5年間、問題がなければ再発の危険はぐっと減るのも事実です。

このため、多くのがんでは治療によりがんが消失してから5年間、再発がない場合は治癒とみなすことが一般的です。5年生存率が便宜上、治癒率の目安として使われてきました。ただ、がん以外での死亡を除く必要があるため、実際には「5年相対生存率」が5年生存率を示す数字として主に使われています。

この5年相対生存率は、同じ性別、年齢の日本人の5年後に生存している割合と比べ、がんによってどれだけ低くなるかを示す数字です。臓器ごとに大きく異なっています。たとえば、がん全体の5年相対生存率は63％ですが、甲状腺がん、前立腺がんではそれぞれ92％、87％と高い値になります。

一方、膵臓（すいぞう）がんでは6・5％にすぎません。また、5年生存率はがんの進行度によっても大きく異なります。最も早期の1期ではがん全体で90％ですが、別の臓器に転移があるような4期では17％と低くなります。

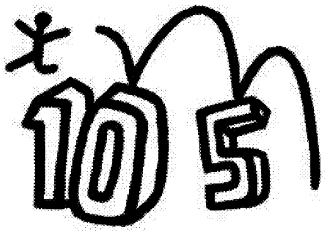
これまで日本では、がんの5年生存率しか集計されてきませんでしたが、国立がん研究センターが今年1月、10年相対生存率をはじめて発表しました。がん全体では58％でした。5年相対生存率の63％から、あまり下がっていないことが明らかになりました。

とくに、胃がんは5年が71％、10年が69％とほとんど同じでした。胃がんは5年生存率をほぼ治癒率と考えても構わないことが分かります。大腸がん、子宮がんでも同様の傾向がみられます。

一方、乳がんでは5年生存率が89％、10年では80％と低下していました。さらに、肝臓がんは32％から15％へと大きく生存率が下がっていました。これらのがんでは、5年生存率を治癒率と考えることはできません。より長く経過をみていく必要があるといえます。

がんは、できる臓器や進行度ごとに違った病気と考える必要があるのです。

（東京大学病院准教授）



イラスト・中村　久美